

バスケットボール競技におけるパスがシュートに与える影響

Relationship between pass angle and shoot percentage in basketball

1K05A507

望月 麻希子

指導教員

主査 倉石平先生

副査 磯繁雄先生

1. 緒言

1881 年、J.Naismith によってアメリカで創案されたバスケットボールは、リングにボールを入れることで得点をしていくスポーツである。日本の武器はシュート、特にアウトサイドのシュートであり、それは今後も変わることはないと言われている。シュートをさらに大きな武器とするべく、そのスキルを高め、これまで以上に成功率を上げていくことは大きなテーマであると考えられる。そこで本研究では、オフェンスを人数の差異による3つの段階、ファスト・ブレイク、セカンダリー・ブレイク、セット・オフェンスでのスリーポイントシュート、またそれぞれのシュート直前のプレイの頻度と成功率、さらにシュート直前のプレイ各種による頻度と成功率を調べることを目的とした。

2. 方法

関東大学女子バスケットボールリーグ戦における1部リーグの全56試合を対象とした。試合を撮影し、その映像をパソコン画面で再生しながら、スリーポイントシュートを、シュートが放たれる前からシュートに至るまでの経緯、またどの位置に誰がいる状況であるのか、ボールと人物の軌跡をシュートチャートに書き表した。それをオフェンスの3つの段階、シュート直前のプレイによって分類した。

3. 結果

全56試合におけるスリーポイントのうち、82%がセット・オフェンスのなかで放たれたもの、次いで13%がセカンダリー・ブレイクのなかで放たれた

もので、ファスト・ブレイク、インバウンズ・プレイのなかで放たれたものはどちらも全体の3%であった。それぞれの段階で最も成功率の高いシュート直前のプレイは、ファスト・ブレイクではインサイドアウトで75.0%、セカンダリー・ブレイクドリブル→キックアウトで42.3%、セット・オフェンスではステイ→1ドリシュートで34.1%、インバウンズ・プレイはエンドスローインで33.3%であった。次に、シュート直前のプレイそれぞれのシュートの投射数とスリーポイントシュート全投射数に対する割合は、ボールマン311本(18.0%)、アウトサイドパス846本(49.0%)、インサイドパス568本(32.9%)となり、アウトサイドパスによるシュートが最も多く、次いでインサイドパス、ボールマンの順となった。このときの成功率は、ボールマン22.5%、アウトサイドパス29.1%、インサイドパス30.1%であり、アウトサイドパスとインサイドパスによるスリーポイントの成功率に大きな差はみられなかった。さらに、ディフェンスの有無別でそれぞれの成功率をみたところ、ディフェンス無ではボールマンが25.9%、アウトサイドパスが30.9%、インサイドパスが31.1%、ディフェンス有ではボールマンが18.3%、アウトサイドパスが24.3%、インサイドパスが23.6%とあまり差がみられない。しかし、シュート前のプレイが同じであるときのディフェンス無と有ではその成功率に差がみられた。

4. 考察

ファスト・ブレイク、インバウンズ・プレイによるスリーポイントシュートで特に成功率の高いシュート直前のプレイがあったことは、その頻度が少ない

こと、またノーマークでスリーポイントシュートを放つことが多いからであると考えられる。シュート前のプレイそれぞれの成功率については、ボールマンのみが低く、アウトサイドパス、インサイドパスは差がない。このことから、アウトサイド、インサイドの方向に関わらず、パスをレシーブしてスリーポイントシュートを放つ方が成功率は高くなることが考えられ、シューターにはシュートを放つ際に「パスを

レシーブして放つ」という動きの中に一連の流れがあるのではないかと考えられる。また、シュート直前のプレイに関して、同じ項目においてディフェンス無と有での比較をしてみると、成功率ではいずれも 6%以上の差がある。このことから、ディフェンスの有無はスリーポイントシュートの成功率に影響していることが実証された。